

1. 分封（蜂）群の捕獲準備

①待ち箱と飼育箱の製作 ②金稜辺の栽培



写真は重箱式待ち箱兼飼育箱。1段(外寸30×30×15cm前後)の枠を2～3段重ねて待ち箱とし、捕獲後は飼育箱とする。巣板は下へ伸びていくので、成長に併せ継ぎ枠を足して行く。

金稜辺は、和蜂の分封群を誘引する働きがあり、分封期に咲かせるよう加温栽培する。(隠岐島前では4月中旬～5月上旬が最盛期)

2. 分封捕獲

待ち箱と金稜辺をセットで設置する。(金稜辺は受粉すると花が散ってしまうので、受粉されないようにネットで覆う)



左：金稜辺赤花原種。実生の場合開花までに6～10年を要す。

右：金稜辺と待ち箱の設置。

3. 飼育箱の設置



分封群を捕獲したら、その日の内に飼育場所に移動、設置する。巣門が東～南向きになり、前面が開けた場所に設置し、風雨対策をする。落葉樹の下等冬には陽が当たり、夏は木陰になるところが望ましい。屋根には波板等に乗せ、風で飛ばされないよう錘で押さえる。更に巣箱が倒れないように杭やロープ等で固定する。

左：誘導板に集合した分封群



巣箱に取り込んだ捕獲群（約 3,000 ～ 5,000 匹）



ハンテンボク下群

4. 継ぎ枠 ハンテンボクの下に設置した重箱式巣箱。（巣箱には、角胴、丸胴、巣枠式他色々なものが使われている）巣板が成長したので継ぎ枠を足したもの。継ぎ枠に覗き窓をつけておくと観察に便利である。

5. 採蜜

1～2年に一度、最上部を1段取り外し採蜜する。巣板を一枚ずつ切り取り、包丁等で蓋をそぎ落とす。バケツの上に金網のざる、出汁濾しネル等に乗せ、その上に巣板を置く。蜜はゆっくり落ち、バケツに貯まる。気温が低いと中々蜜が落ちないので、暖かい日を選ぶか加温する。数日間すれば綺麗な百花蜜が出来上がる。



垂れ蜜採取中（右）

切り取った蜜枠（左）



※ 花の種類によって異なるが、気温が 10℃を切るようになると凝固し始める。凝固しても品質等に変わりなく、湯煎すれば元に戻る。その際、高温になりすぎると、蜂蜜に大切なビタミンやミネラルの変質、酵素等の死滅の恐れがある。糖度が 79%以下の蜂蜜は発酵する。この百花蜜は 79%以上あるので常温保存できる。

右：糖度計



島根の ポツンと

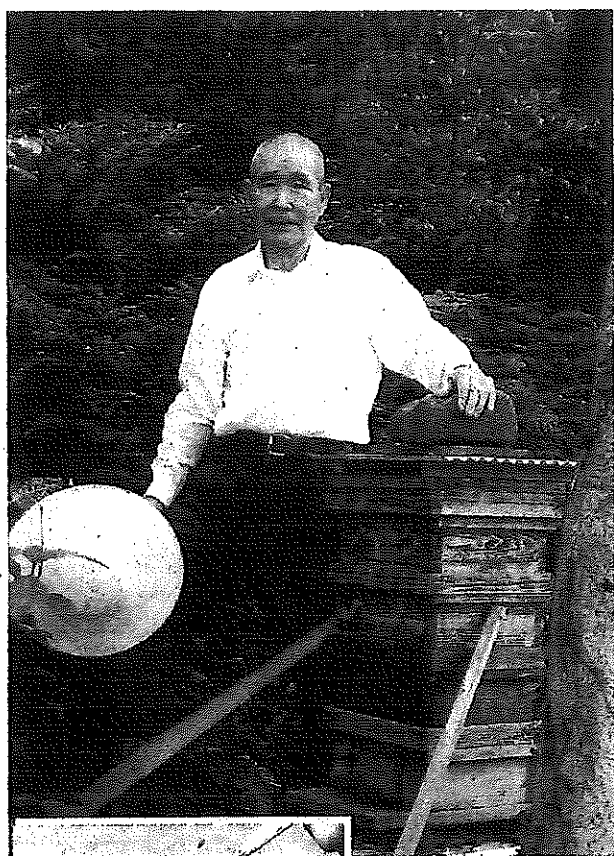
農産物

J Aしまね隠岐どうぜん地区本部管内で飼育されたニホンミツバチから採取される蜂蜜「百花蜜」は、さまざまな種類の花の蜜が混ざるため、風味豊かな味わいが特徴だ。

ニホンミツバチは以前、島前の西ノ島町では生き残っていたが、知夫村と海士町では絶滅していた。今では島前全域で見ることができるようになった。そんなニホンミツバチの復活、飼育を目指してきたのが、西ノ島町在住の安達和良さん(78)だ。「和蜂復活プロジェクト」を立ち上

蜂蜜「百花蜜」

西ノ島町 安達和良さん(78)



① 工夫を凝らして自作した巣箱を使いニホンミツバチを飼育する安達さん
② 「百花蜜」

げ、今では賛同者54人で取り組んでいる。安達さんは十数年前、西ノ島町で生き残っていたニホンミツバチを捕獲、繁殖し、絶滅地域での復活を目指した。2013年4月に海士町、同年5月に知夫村へ移住させ、両地域とも完全復活を遂げた。ミツバチの飼育に欠かせない巣箱は、所有している山林の木材を使い自ら作成する。賛同者の中には「百花蜜」を商品化し、販売している人もいる。知夫村が伝えられている今、今年5月に知夫村へ移住させ、両地域とも完全復活

和蜂復活に尽力保存へ



島根には誇れる農産品がたーっくさん!

島根のいいもの 再発見!!

直撃・生産者インタビュー

西ノ島町 ニホンミツバチ

10月は、隠岐どうぜん地区本部。西ノ島町で、ニホンミツバチの飼育・採蜜に取り組む安達和良さんにお話を伺ってきました。



お話を伺った安達和良さん。

長年の夢だった養蜂

隠岐の西ノ島町で教員として勤めていた安達和良さんは、蜂蜜が好きで長年、蜂を飼いたいと考えていました。蜂蜜といえば、店頭に並んでいるほとんどの商品が西洋ミツバチのもので、安達さんも当初は西洋ミツバチを飼おうと思っていました。勉強していくうちにやはりニホンミツバチの方が良いことに気づきました。西洋ミツバチは海外で家畜として改良された品種であり、病気や冬の寒さに弱く、スズメバチに襲われると負けしてしまうなど、人の手を十分にかけてやらないと生きていきません。一方、ニホンミツバチは元々日本にいた在来種な

ので、気候や風土に合っています。それに、スズメバチに襲われた際には、何十匹も固まって自らの熱を致死量まで上げて熱殺させ生き残ることができません。採れる蜜の量は少ないですが、育てやすさからニホンミツバチの方が適していると考え、まずは隠岐島中の生息調査から始めました。



ニホンミツバチ。西洋ミツバチより体が小さい。穏やかな性格なので、こちらが何かしない限り減多に刺さない。

ニホンミツバチの 復活プロジェクトを発足

生息調査を進めていくと、海士と知夫はすでに絶滅し、西ノ島と島後（隠岐の島）は残っていることがわかりました。その蜂を捕獲し、飼いはじめたのが約15年前。それから徐々に群れを増やすことができたようになったところで、「和蜂復活プロジェクト」を

立ち上げ、メンバーを募り飼育を広げていく活動を始めました。メンバーの住む、海士・知夫にも巣箱ごと移住させ育ててもらおうことで、3年後には隠岐諸島すべてでニホンミツバチの復活を確認することができました。プロジェクトは今年で6年目を迎え、メンバーも54名に増えました。県外からのイターン者が多く、蜂蜜を商品化して販売している人も数名います。



自作の巣箱。ミツバチが住みついた巣箱を、プロジェクトメンバーにそのまま譲っている。

ニホンミツバチの 飼育方法

春になると、蜂はどんどん産卵して巣箱に1〜2万匹まで増えます。数が増えたと王台という特別な部屋に新しい女王蜂の卵を産み、孵化する前に古い母親女王蜂は群れの半分を連れ、子の女王蜂に巣箱を譲って出て行きます。そ

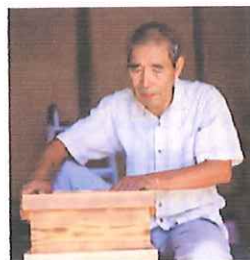


蜜がたくさん溜まった状態。巣箱に窓をつけて、中の様子が見えるように工夫されている。

れが分蜂（巣別れ）です。1つの群れから、およそ3群に分かれます。その分蜂を狙って捕獲し、2、3段重ねた新しい巣箱で飼育を始めます。その際の蜂の数は約3〜5千匹。巣箱の中では、蜂が自分たちで発熱・冷却しながら温度を35℃にキープしています。その後も産卵・子育てを繰り返し、数が増えてきたところで段を増やしてやりま



巣箱の中がいっぱいになると、外に出てくる。この場合に、もう一段継ぎ足す。



様々な工夫を施しながら、巣箱をすべて自分で作成している。

ることが必要です。安達さんが現在飼育しているミツバチは20群。それぞれの巣箱にカメラを入れて撮影し、中の蜂の数や様子を確認しながら調節していきます。

工夫された巣箱やグッズをすべて自分で作成

蜂を育てる上で、安達さんのいちばんの仕事は巣箱作り。自分で育てた木を切って持ち帰り、チェーンソーで板にしてから作っています。その際、窓をつけて外からでも中の様子を見えるようにしたり、

蜂たちは、一番上の巣板に蜜を溜めていきます。これを1枚ずつ外し、バケツの上に乗せた、ざる、出汁漉しネルの上に置いて置くと、ポタポタと蜜が下に落ちていきます。気温や糖度によりですが、すべて落ちるのに約1週間かかります。こうして、蜂蜜が出来上がります。



ニホンミツバチから採れる蜂蜜は西洋ミツバチの4分の1の量でごくわずか。しかも越冬のためだけに蜜を溜めるという性質上、1、2年に一度しか採蜜できないので、とても貴重な蜜です。味は、西洋ミツバチに比べて少し酸味があり、そして「百花蜜」と言われるように、四季折々の様々な種類の花の蜜が混ざるので、味わい深いのが特徴。糖度が79度あれば常温で永久保存できます。また、ミツロウとホホバオイルを混ぜたクリームは冬の乾燥する時期の保湿剤としても良く、あかぎれ予防やリップクリームにも適しています。



中を撮影するためのカメラを入れる扉を作ったり、夏の時期の通気を良くするためのスペースを開けたりと自分なりに創意工夫を重ねています。また、オオスズメバチのシーズンには集団で巣箱の入り口をかじって中に侵入してくるので、このためにスズメバチ防止柵を作成。絶妙な幅の出入り口はミツバチの出入りは可能ですが、オオスズメバチは入れないように工夫されています。



3段積み重なった部分がスズメバチ防止柵。入り口は絶妙な幅で作られており、ニホンミツバチのみ出入りができる。



モクゲンジとキハダ。この他にも蜜源となる多種多様の植物をすべて自分で育てている。

隠岐はミツバチの天国

ニホンミツバチは蜂蜜を作ることはもちろん、木々や野菜に花粉を運び受粉させることで植物の生長に役立っています。「どちらかといえば、探蜜よりはその方が大事」と語る安達さん。このまま絶滅しないように蜂を増やした状態を維持したいと考えています。ミツバチは、農薬にすぐく弱いので、田んぼや果樹園、



ダム近くの蜂場。

ゴルフ場などの周辺では飼えません。隠岐地方でも多少被害が出ている場所もありますが、今のところ本土に比べると圧倒的に少なく、ミツバチが住むには天国です。安達さんは「今後、可能であれば本土にも移住させてどんどん増やしていきたい」と、ニホンミツバチと共に新たな挑戦を続けています。

離島で日本ミツバチ 復活プロジェクト

隠岐諸島の西ノ島で教員を務めていた安達和良さんは、いつかミツバチを飼いたいと思い、約30年前から蜜源になる木を植えたりして準備してきました。

しかし生息調査してみると、以前はそこじゅうにいた日本ミツバチが、アツクイムシの防除のせいか、西ノ島では2集落でしか見られなくなり、隣島の知夫里島や中ノ島（3島合わせて「島前」）では絶滅してしまっていることがわかりました。これを憂えた安達さん、約15年前、日本ミツバチを



日本ミツバチの採蜜

復活させるプロジェクトを立ち上げたのです。

初めて群れを捕獲し、3群に分けさせることに成功したのが10年前。だんだん上手になり、毎年30群ずつ増やせるようになりました。

これが軌道に乗ってきたところで、西ノ島で増やしたミツバチを巣箱ごと知夫里島と中ノ島にいるプロジェクトのメンバーに譲り、各島々で増やしてもらうことになりました。2島でもしだいに日本ミツバチが定着しています。メンバーも45人に増えました。

その仲間のなから、ハチミツを商品化し観光協会の店などで販売する人も3人出てきました。奈良から移住してきた「ターソン者や、岩ガキの養殖を本業とする漁師など、顔ぶれも多彩です。

アツ枯れが進みアツがなくなつた島前では、アツクイムシ防除もなくなりました。今、日本ミツバチの楽園になりつつあるようです。

秋の採蜜を前に自宅裏の巣箱を見回る安達和良さん。円内は巣箱に群れるニホンミツバチ＝島根県西ノ島町美田



隠岐をミツバチの楽園に

隠岐諸島をミツバチの楽園に。島根県の隠岐島前地域(西ノ島町、海士町、知夫村)で、ほぼ姿を消していたニホンミツバチが復活した。風土に合った在来



隠岐島前のニホンミツバチから採った蜂蜜商品

島前で飼育者拡大

在来種の蜜 特産化狙う

種を飼いたいと、西ノ島町 査をしたところ、松くい虫内の男性が始め、海士町や 防除の影響で海士町や知夫知夫村に活動が拡大。本土 村でほぼ姿を消し、西ノ島から60キロ離れた島で地道な 町内の2集落にしかないなか

て巣箱への定着につなげ 高だが、すぐに売り切れる 人気ぶりだ。

ニホンミツバチは、病気 や寒さに弱いセイヨウミツ バチに比べ飼育しやすい。 副収入を求めて飼育する Iターナー者が多く、2年前 に東京から移住した僧侶の 柴田照輝さん(33)は檀家に 蜂蜜を贈るため10万匹以上 を飼う。「花粉を脚にたく さん着けて飛び回る姿が愛 後味が特徴だ。

安達さんの活動は島前3 町村に広がり、2013年 から住民有志と各島に巣箱 を移し繁殖や飼育を進める 「和蜂復活プロジェクト」 を始めた。農家の受粉にセ イヨウミツバチを使わない よう直接要望するなど、3 年前から島前全域で生息 が確認されるようになった。 現在は54人が飼育する。 環境を豊かにすることに 関心がある。安達さんは「今 採蜜できる量がセイヨウ ミツバチの5分の1ほど。 後は本土の飼育希望者に 希少なため、店頭価格は1 000円入りで約2千円と割 力を込める。(森山郷雄)

取り組みが続き、「島の蜂 蜜」として特産品化を目指 す動きが出ている。

中心となって手掛けるの すみやすい巣箱の構造や、 は安達和良さん(78)＝島根 県西ノ島町美田。飼育を始 増やす「分封」を促す環 境を独自に研究。5年かけ

めめたのは約15年前。生息調

ニホンミツバチ復活 安達さんら 隠岐・島前で養蜂



巣箱を自作する安達さん（今年2月、いずれも西ノ島町で）

西ノ島町で養蜂に取り組み元中学校教師、安達和良さん(79)が、有志らと蜂が蜜を集める樹木を増やすなどして、隠岐諸島の島前地域でニホンミツバチを復活させた。蜂蜜を商品化する住民も次々と現れており、本土からも飼育に関する相談が寄せられている。
(佐藤祐理)

ニホンミツバチ復活

ニホンミツバチはセイヨウミツバチより小型で、自然環境の豊かさの指標とされる。全国的にダニや病気の影響で個体数が減少し、樹木の伐採などですみかが脅かされているという。

安達さんは約15年前にニホンミツバチの飼育を始めた。国産蜂蜜を求めていたが、高騰して入手しにくかったことをきっかけに、専門書を参考にしながら手探りで挑戦したという。

4月上旬と5月上旬の巣別れの時期に花が咲くとされるキンリョウヘンで、誘引しようとしたが、本土と開花時期が異なり、試行錯誤。ハウスで加温して開花を調整し、巣別れに重なるよう工夫を重ね、「孤軍奮闘で、たどり着くのに5年かかった」と振り返る。神社のこま犬の台座などにすみついた個体を集め、徐々に数を増やした。

一方、自然界には春と秋に咲く花が多く、それ以外の季節は蜜源が不足しがち。安達さんは

商品化次々 本土から飼育相談

ヒマワリやサルズベリ、ビワなど、夏と冬に咲く花を意識しながら植え、生息環境を整えた。新たに蜜源になる植物が増えたことで、ニホンミツバチに好ましい環境になった。

安達さんの調査によると、ニホンミツバチは、隠岐諸島では隠岐の島町と西ノ島町には生息している。一方、海士町(中ノ島)と知夫村(知夫里島)ではいなくなっていたことが判明し、2013年に「知夫里島・中ノ島和蜂復活プロジェクト」を設立。有志に飼育方法を伝授しはじめ、蜂と巣箱、蜜源にな



ミツバチを誘引する植物などの栽培も欠かせない(昨年8月)

る植物の苗なども分けた。ニホンミツバチは3年で復活し、プロジェクトの会員は50人以上に増えた。中には蜂蜜の販売を始める人も。その一人が東京都出身で西ノ島町の常福寺住職、柴田照輝さん(34)。約10万匹を飼い、毎年秋に蜂蜜を採取し、檀家や近所の人から野菜や魚をもらったお礼に配っている。

セイヨウミツバチの蜂蜜よりも風味豊かで濃厚だといひ、町民向けに1000〜10000円で量り売りをしている。町のふるさと納税の返礼品にも採用されているが、採取できる量はセイヨウミツバチの3分の1〜5分の1程度で、秋まで品切れが続くという。

柴田さんは「養蜂を通じて仲間も増え、草刈りも『蜂のため』と苦にならなくなった。花を増やして島の環境もよくなった」と話す。安達さんは「蜜源が豊富になり、蜂たちもすくすく元気になっている。商品化すれば互いに張り合いも出る」とし、「保存に力を入れながら環境整備を進め、蜂も人も住みやすい島にしたい」と意気込んでいる。

ニホンミツバチ保護へ

サンクリーンが養蜂業参入

駆除技術活用し種の保存

希少性の高いニホンミツバチの養蜂業に、ビルメンテナンズなどのサンクリーン(米子市西福原5丁目)が参入した。手掛けてきた

蜂の駆除で培った知識や技術を生かし、大山山麓に構えた農園で種の保存に取り組みつつ、蜂蜜商品を販売する。農園は将来的に採蜜体験できる場としての活用も計画している。

同社は屋根裏に発生するニホンミツバチの巣の駆除に対応。養蜂業で外来種が一般的に飼育されるなどして数が減少する中、駆除で



ニホンミツバチを使い、商品化した蜂蜜
—米子市西福原5丁目、ハニークロス

はなく、保護、活用できないかと考えた。関連会社のハニークロス(同)を立ち上げ、鳥取県伯耆町内に約5千平方メートルの農園を整備。保護したニホンミツバチを移設し、養蜂事業を始めた。

同社によると、ニホンミツバチは蜜の生産量が外来種と比べて少ない一方、複数の花を蜜源とするため、

さまざまな種類が混ざった蜜が採取できる。「百花蜜」と呼ばれ、まろやかでくせのない味わいが楽しめるという。商品は今秋から販売を本格化し、非加熱の瓶詰(120g入り)が3280円(税別)。棒状の持ち運び型(2.5g入り10本)もあり、電話注文に加え、米子市米原6丁目の店舗「フンカフェ」で販売している。今後、百貨店などでの取り扱いも予定する。

飼育する約4万匹は繁殖を繰り返し、規模拡大により農園は将来的に地域の子どもたちが花の種植えや採蜜体験ができる施設とする考え。

ハニークロスの社長を兼ねるサンクリーンの竹ノ内賢一郎社長は「害虫駆除では微量ながらも薬剤を使い、環境に負荷をかけてきた。新たな養蜂業を通じ、豊かな自然環境づくりと魅力ある商品の発信、雇用促進に取り組み」と話した。

(森安哲史)

山陰経済 Sanin Economy